

報告4：佐藤千歳（北海商科大学）

中国のプロテスタント「家庭教会」による社会参加の試み
—天安門世代の影響を中心に

1980年代の宗教復興において信者が急増したキリスト教プロテスタントの非公認教会、通称「家庭教会」について、家庭教会による社会参加の試みとその背景を、本発表では示す。とくに都市部の新興教会で、1980年代の学生運動を経験した世代がリーダーとなり、教会の社会参加を進めていることについて、社会運動と宗教信仰が結びつくプロセスと具体的な社会参加の実態を明らかにする。そのうえで、宗教信者の大半が社会活動に消極的と考えられる中国の現状において、社会事業や体制への異議申し立てを実践する非公認の宗教団体が、宗教共同体および社会に与える影響を検討したい。

家庭教会は、政府の宗教管理部門に登録しないプロテスタント教会の総称である。信者の属性や設立時期、所在地によって実態は多様であり、1949年以前に起源を持つ教会、農村の教会、および都市部の新興教会の3勢力が、相互に影響しながら教勢を拡大した。公認宗教制の外部で短期間に成長した家庭教会が、中国社会にどのような変化をもたらすかについて、先行研究では、知識人の教会をとりあげて入信による思想・行動上の変化を追ったり [Li Ma Jin Li 2014]、言論を通じた社会変革の試みをとったりしたものがある [Wielander 2009]。ただ、社会運動と信仰が結びついた過程や、社会参加の具体的な活動についての研究は少数にとどまる。

本発表では、学生運動の経験者がリーダーを務める複数の家庭教会を事例にとりあげ、運動経験者が入信した経緯を、入信の鍵となった人物と、思想的な核となった教義を軸に検討する。学生運動を経験した信者は、建国期から宗教弾圧を受けた王明道(1900～1991年)ら家庭教会の「第一世代」から、その経験を語りとして引き継ぎ、政治参加がもたらす「苦難」を信仰上の恩恵として積極的に評価する「苦難神学」という教義解釈を提起していた。そのうえで、教会をプラットフォームに、陳情者、弁護士など複数のネットワークを結びつけ、民生・教育・福祉分野での社会参加を進めていた。

参考文献：

Li Ma and Jin Li (2014) 'Remaking the Civic Space', in *Christianity in Chinese Public Life: Religion, Society, and the Rule of Law*, edit. J.A.Carpenter and Kecin R. d.Dulk, Palgrave Macmillan.

Wielander, Gerda, (2009), 'Bridging the Gap? An investigation of Beijing intellectual house church activities and their implications for China's democratization', *Journal of Contemporary China*, vol. 18(62): 849-864.